

## 太平洋戦争のときのもう一つの飛行場

太平洋戦争のとき、喜界島に飛行場が二つあったことをご存じですか？

一つは、中里集落にある現在の喜界島空港です。この飛行場は、日本海軍の不時着用の飛行場として1932(昭和6)年に造られました。

太平洋戦争で、1945(昭和20)年沖縄にアメリカ軍が上陸し沖縄戦が始まると、この飛行場は特攻機の中継基地となりました。しかし、敵機の攻撃が増えてくると、特攻機の出撃ができないときもありました。

そのため、島の反対側に位置する志戸桶集落の海岸にもう一つの飛行場が造られました。

しかし飛行場といっても、本物の飛行場ではありません。竹とわらで編んだ模擬の飛行機を並べ、吹き流しを立て、あたかも本物の飛行場のように見せた模擬飛行場です。

敵機がこの模擬飛行場を攻撃している間に、中里集落にある飛行場から特攻機を出撃させていました。

ところで、どうして志戸桶集落の海岸に飛行場を造ることが出来る広い場所があったのでしょうか？喜界島は、周囲をサンゴ礁が持ち上がってできた平らな場所、「段丘」に取り囲まれています。特に、志戸桶集落の海岸は、もっとも段丘の幅が広い場所の一つだったので、そのため、ここに飛行場が造ることができたようです。



かつて模擬飛行場のあった志戸桶集落の海岸